

950222火 本日のレジュメ

19日

24日10時

うつみ

9月

1、名簿確認、その他確認連絡 (知事秘書 署名簿提出について)

2、自己紹介

3、今までの経過報告

4、署名簿要望書内容検討

5、院長交渉内容検討協議

6、今後の取り組みについて

23日院長会見?

7、本日の連絡網継走

8、読売記者連絡 (10時まで)

① 手紙 - 吉田

② 延任10 (行方不明)

③ (7-7, 伊藤
ビブス)

④ 読売記者連絡 (10時まで)

連絡網継走

伊藤 延任
Lunyc

メモ

茅

950222

毛塚先生を支援する患者の会（駒込患者の会）

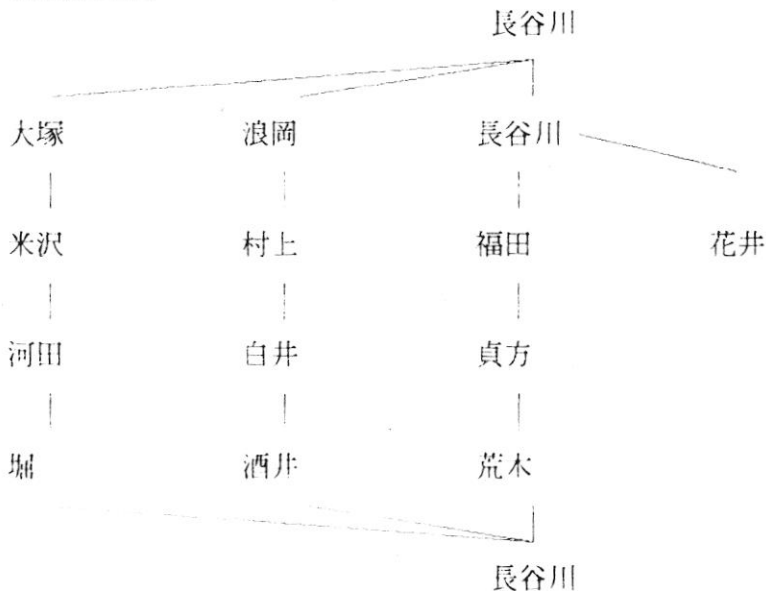
名簿 部外秘

代表委員	代表	大塚敦子	3813-1997	
	副代表	浪岡満子	0429 58 8032	
	連絡書記	長谷川潤	3938-6794	
代表会員		村上 豊 裕	3364 1153	
		米沢ふじこ 子レ子	3946 6603	
		福田 さゆり 幸一	3945 9126	
		河田 よしこ 茅子	0426 36 7458	
		白井 ゆたか 豊	048-255-2061	030-918-0020
		貞方博子	0474-24-5356	
		堀スミヨ	3800-6799	
	取引	取付 酒井まさこ 子	5685-6534	
		荒木みよ	3831-4343	
		花井としこ	3853-1871	

・役割は便宜的なものです。適宜変更を。

・会員はここ数日のうちに連絡を下された有志です。院長会見などの時には出席したいという方がまだまだいらっしゃいます。

緊急連絡網



大塚 → 東工 連絡担当
↓
長谷川
↓
Eメール

*最後の方は長谷川へ連絡を！

*不在の場合はとぼして連絡をして下さい。不在の方がいた場合には直接、長谷川へ連絡

都立駒込病院に心身医療科（心療内科）を
存続させることに関する要望書

住所

氏名 大塚 敦子

電話 381311997

外 名

要旨

- 一、都立駒込病院から心身医療科をなくさないで下さい。
- 二、今まで通り毛塚満男先生を常勤のままにして下さい。

理由

一、病院は誰のためにあるのでしよう。

もちろん、患者のためでしよう。しかし、私たち患者は、病院側から心身医療科に常勤医がなくなることを何も知らされておりませんでした。唯お一人の常勤医の毛塚先生は、患者の不安、シヨックを著しく性質の違う心身医療科です。唯お一人の常勤医の毛塚先生は、患者の不安、シヨックを少しでもやわらげるため、四月以降患者さんを見られなくなる可能性があるかもしれない。「—今までのように常勤医がいなくなるかもしれない。」とだけもらされませんでした。早く耳にした者でも一月の末のことです。このような大事を、病院、行政サイドだけで、ごく短期間に決定することは、命取りとなることもおおいにあります。

二、非常勤医だけにすることは、心身医療科をなくすことになる。

病院側は非常勤で対応していくとお考えのようです。病院側が、このような決定をしようとする^{もの}こと自体が、正に心身医療科への認識がこのような者だったのかと患者一同悲嘆にくれる次第です。

当然のことですが、非常勤の先生だけですと、今までのように、病気を抱えながら社会で活動する人間たちへの、緊急かつ細やかな病状の変化に対応していただけなくなり、社会で手当の薄い、身分保証も常勤とは格段に違う非常勤の先生方は長期にわたって勤務してい

ただけなのは、火を見るより明らかです。(他の施設でのそのような事例は多々あります。)
これでは、何年も通院する患者がいる心身医療科が短い将来なくなることになります。それが、病院側の本当のねらいなのではと、疑念を持つても当然だと思います。

三、精神科があれば心身医療科はいらないと考える人がいるようです。

心身医療科と精神科は違うと思います。

このたびの不幸な阪神大震災の際でも、NHKのニュースの解説では一日とおかず、被災者のメンタルケアの大切さを取り上げていました。小児精神学会も時を置かず子供たちの精神状態のために、会を開き連絡協議をしていました。

読売新聞の人生相談にも、回答者に慶応の保崎秀夫先生が加わる時代です。このような例を上げたら枚挙にいとまがありません。

心の時代と言われながら種々の心身の不調、病気が増加し、その病気にも多様なものが出てきています。

一方で街には精神ケアを銘打って多額の金銭を要求する施設も多くある世の中です。心のケア施設はますます重要になっていくと思われれます。

そのような状況の中で、精神科の先生の中にもいろいろのお考えの違いがあり治療の方法にも差があると聞きます。薬物治療だけに重点をおく方、心のありように手だてをこうじて下さる方、いろいろだと聞きます。そして、患者の中には多くの精神科を渡り歩いて当病院にたどり着いた者もいます。

この様に現代では、心を病む者も多様であり、当然精神科でもなく内科でもないという、境界事例の患者さんがたくさんいると思えます(日本では、心を病むことを恥とする風潮があり、時代が進めば実質的な患者数はもつと増加するでしょう。)

先に挙げた保崎先生も紙上で、病状にあわせて精神科や、心療内科などに気軽に行つて下さいとよく答えておられます。

当病院では、診察室も内科や小児科の近くに目立たぬよう配慮され、その診察も他と違い、治療の方法も独自のものがありません。病状にあわせて時間的にも余裕を持たせて下さっている